

「タダ働き」なんかできるか! 小集団活動を 粉碎するぞ!!

〔その2〕



87. 6. 15

No. 2576

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五・六(公衆)〇四七二(22)七二〇七

大々的なマル生運動の組織化を狙う 小集団活動

「未来への希望と情熱に生き生きと輝き、全身からは活力があふれ、・・・明るい未来を切り拓こうと、活気に満ちる小集団グループ」、「あくまですみわたった海原のような会員達の気持ちに、頑張れ!〇〇会」と、心の中で叫ばずにはいられない!—JR東京圏営業本部・運行本部の発行する広報紙「JR東京圏」は、こんな調子の小集団活動に関する記事でうめつくされている。このあまりにも職場の現実とかけはなれた歯のうくような言葉の無内容な羅列は、まるで新興宗教の機関紙でも読むような印象を受ける。

当局は「全社員を小集団グループに組織する」と称して、国鉄労働者を大々的なマル生運動にかりたてようとしている。

現実には「ただ働き」の強要

小集団活動とは、当局発行の資料によれば、「職場活性化、業績の確保・向上を果たすための全員参加、自主管理方式による職場活動」のことであり、「社員の幸せと企業の繁栄を併せて実現させる」のが目的だとされている。しかし「職場活性化」「自主管理」「社員の幸せ」など、あたかも労働者のためであるかのような言葉がちりばめられているうらで現実には、いつたいどのようなる事態がおきているのか。

小集団活動の名の下に、現実に行われているのは膨大な「ただ働き」の組織化である。アケ・非休・公休を返上してのオレンジカード販売・環境美化・便所掃除やペンキ塗り・イベントの準備や企画商品のセールス・「ケケケチ運動」の推進など、いつたいどこが「社員の幸せ」につながるのか。ただでさえ十万人首切り攻撃によるかつてない労働強化の現実のなかで、ヘトヘトになつた体に、出向・配転・勤務成績査定等の有形・無形の恫喝によって、ムチ打たれ、「ただ働き」を強制されているにすぎないのだ。

千葉運行部は「まごころをこめて行動する運動、グリーンキャンペーン」と称して、六月からこの小集団による「ただ働き」を大々的に組織化しようとしている。しかも、目標ひとり15万円のノルマまで決められているのだ。

職場では命令と服従による支配が横行

一方職場では、あごひもやカーテン、はては、靴の色・ネクタイピンまで助役が監視し、経費節減と称して職制が庁舎中の電気を消して歩き、職場のテレビまで撤去する。そうかと思えば、労働者を監視するためには、いくらでも金をつぎこんで、一日にして全詰所をガラス張りにする。さらには、勤労千葉や国労の組合員が使用する比率が一番高いというだけで、最も使用ひん度の多い乗務員詰所の鉄道を一齐に撤去するなど、何の意味もないしめつけのためのしめつけ、命令と服従による支配が横行しているのである。

小集団活動は、このような当局の労務政策の中心をなすものとして位置づけられている。われわれが注意して見ておかなければならないことは、この小集団活動が「自主的」にただ働きを強要するためだけのものではないということである。

この攻撃の最大の狙いは、小集団をとおして、企業が労働力ばかりか労働者の心までも支配しようとしているところにある。資本が様々な企業の活動に労働者を「参加」させることをもって、労働者の牙をぬき、労働組合の牙をぬいて、労働者としての意識・組合意識を解体させようとしているのである。「小集団活動の実際」という本には、小集団の説明として、インソップの「北風と太陽」の話为例に引いている。いくら強く風を吹かせても旅人のマントを脱がせられない(労働者は当局のいうことを聞かない)むしろ、ポカポカに照らす方がマントを脱ぐというのである。だから当局は山のようにきれいな言葉をならべたてている。しかし、「衣の下には銭」が地ハダを見せているのである。大量首切り・失業・出向・配転・命令と服従による職場支配・大合理化による労働強化など、労働者を人間とも思わぬような資本による強権的支配を下からおぎなうものとして、小集団活動という労働者支配の方法が生み出され、全世界で採用されてきたのである。

小集団活動に応じない職場の団結を

小集団の問題を軽視せず、小集団活動や提案制度には絶対に応じない職場の団結を固めよう。資本と労働者は絶対に相入れない対立関係にある以上、職場も生活も権利も全ては闘いによってしか守ることはできない。このことを今一度確認し、全力で闘いぬこう。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ!